

氏名(本籍)	金 庚 洙 (韓 国)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博甲第5212号
学位授与年月日	平成21年12月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日韓漢語動詞に関する対照言語学的研究
主査	筑波大学教授 小野塚 裕 視
副査	筑波大学教授 山 田 博 志
副査	筑波大学准教授 佐々木 勲 人
副査	筑波大学教授 博士(言語学) 加 賀 信 広
副査	学習院大学教授 博士(言語学) 鷺 尾 龍 一

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は日本語と韓国語に共通して存在する漢語名詞(特に「運動」などの2字漢語名詞)を対象にした、対照言語学の観点からの研究である。全部で5章から成り、末尾に付記として、韓国語の hada/doeda と結びつく2字漢語名詞および日本語の「する」と結びつく2字漢語名詞の一覧が添えられている。第1章は序論で、第2章では、まず2字漢語名詞から作られる漢語動詞(「2字漢語名詞+する」(例:運動する)と「2字漢語名詞+hada/doeda」(例:chuljanghada(出張する)、mabidoeda(麻痺する))の両言語における動詞・形容詞の範疇化の相違について探求がなされている。両言語の共通する漢語動詞を比較してみると、同じ漢語名詞でも「不足」「卓越」などは日本語では動詞と形容詞の両方の用法があるのに対して、韓国語では形容詞の用法のみしかないという相違が見られる。著者はこのような相違に着目して、両言語において動詞と形容詞の範疇化の境界に差があり、韓国語の方が動詞化の範囲がより狭いことを明らかにしている。さらに、韓国語における2字漢語名詞と hada と doeda との結合関係について、hada と doeda の歴史的変化の視点から、文献資料とインフォーマント調査により、先行研究で扱いきれなかった問題をどのように処理したらよいかについて考察がなされている。韓国語の漢語名詞を hada と doeda という要素を付加して動詞化する際に、それがどのような規則性に基づいているかに関する研究は多数行われてきているが、説明しきれない面が残っている。特に hada と doeda との選択における揺れの問題がある。著者はこの問題を処理するために、hada と doeda の歴史的変化に注目して、主に辞典の例を中心とした資料の収集を行い、揺れが認められる漢語名詞と hada と doeda の結合関係の目録を作成した。その結果19世紀末から20世紀初頭の著作物からとられた例はもっぱら hada 形が使われるのに対して、20世紀後半の例は hada と doeda の混在あるいは doeda 形のみという相違が確認された。これは韓国語では全般的に hada 形から doeda 形への変化が進行中であることを示すものであり、それが hada と doeda の間の揺れの原因であると考えている。さらに収集された資料の一部を利用して、インフォーマントを使った調査も行い、doeda の使用率が高いという結果を得て、doeda 形がその勢力を拡大しているという想定裏付けを得ている。第3章においては日本語と韓国語における2字漢語動詞の他動詞形と使役形の対応関係における相似と相違についての考察がなされている。日本

語の漢語+させるという使役形に対応して韓国語には漢語+ sikida 形と漢語+ ge hada 形が存在する。これらの意味上の対応関係はかなり複雑であるが、本論文ではこの対応関係に着目して、主に韓国語の場合の説明を試みている。主たる対象は、(i) 日本語の漢語+すると漢語+させるの対とそれに対応する漢語+ hada と漢語+ sikida の対が同じ他動の意味で使われる場合、(ii) 日本語の漢語+すると漢語+させるの対が他動と使役で異なるのに対して韓国語の漢語+ hada と漢語+ sikida の対が同じ意味で使われる場合、(iii) 使役を表す韓国語の漢語+ sikida と漢語+ hage hada が漢語に応じて一方のみが可能になる場合の三つである。(i) と (ii) に関しては、事実観察の後、韓国語の hada と sikida が同じ他動の意味で使用される理由の考察が行われており、sikida の歴史的変遷が関わっていることが指摘されている。また (iii) については、この場合の sikida と hage hada の違いを被使役主の意志性の有無によるものとする説明法が提案されている。第4章では、日本語と韓国語において対応関係にある「～中」と「～jung」および「～後」と「～hu」という接尾辞に関して、2字漢語との結合関係が両言語において異なるという現象がみられるが、その違いの原因の探求が行われている。この問題については、両言語の漢語名詞の動詞性に違いがあるという先行研究の考え方を援用し、さらに接尾辞自体の意味特性の相違を絡めて処理する方法が提案されている。第5章は結論である。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は日本語と韓国語に共通して見られる(2字)漢語名詞の振る舞いの類似点と相違点を、主に韓国語の側に軸足を置いて、探求している。第2章の話題の一つである日本語の漢語+するに対応する漢語+ hada と漢語+ doeda の使用分布に関しては、韓国語の話者の間でも判断がいろいろに分かれて、説明するのが困難な面があるが、本論で示された歴史的変化に基づく提案は、一つの新たな見方を提供したという点において評価に値する。地道な作業によって収集された多くの本文中の例文、インフォーマント調査の結果ならびに論文末に添えられた漢語名詞の一覧は、今後の研究にとっても貴重なものであると考えられる。辞典資料に北朝鮮のものを加え、さらにインフォーマント調査の際に韓国人と一緒に中国在住の朝鮮族の話者を含めて、韓国語とは異なる hada と doeda の歴史的変化並びに分布を明らかにした点も評価してよいであろう。第3章の他動と使役の関係についての議論においては、hada 形と sikida 形が同じ他動の意味を表す場合の理由の考察に取り組み、hada の i, hi, li, gi 使役形である haida に注目して、この i, hi, li, gi 使役形成要素のついた動詞には意味変化が生じない場合が多くあること、また歴史的に haida 形は消滅し、その機能を sikida 形が引き継いだという説に従うことによりその理由を説明しようとしている。その論証は必ずしも十分とはいえない面も見受けられるけれども、注目に値する。また、hada 形と sikida 形が同じ他動の意味を表す場合に、「変化」の意味をもつ漢語動詞と sikida とが密接に結びつく傾向があるということ、さらに、使役形を作る際に sikida 形と hage hada 形のどちらか一方が選択される場合については、被使役主の意志性の有無が大きな要因になっていることが指摘されているが、どちらも説明法として興味深いといえよう。第4章で扱われた「～中」と「～jung」と「～後」と「～hu」という接尾辞と漢語名詞との結合関係に関する、漢語の動詞性と接尾辞自体の意味特性を絡めた説明は、着眼点はよいけれども、通用しない事例もあると思われるのでより深い考察が求められる。付記として添えられた漢語名詞の一覧は他動性に基づいて分類されており、今後の研究にとっても貴重なものになるであろう。

本論文は、論の展開や構成の面で不十分と思われるところが一部に見られるが、歴史的変化の視点を交えた、豊富な言語資料に基づく実証的な研究であり、新たな提案と興味深い指摘を含んでいて、総じて優れた論文であると評価できる。

よって、著者は博士(言語学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。